

Title	Cyrano カルテジヤン(1)
Author(s)	赤木,昭三
Citation	Gallia. 1974, 13, p. 19-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/3683
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Cyrano カルテジャン

(1)

赤 木 昭 三

Lachevre と Léo Jordan による Estats et Empires de la Lune などの 未削除写本の刊行, Lachèvre による伝記の書きかえ以後の数十年間は, ほとん どみるべきものがなかった Cyrano 研究も,近年にわかに活況を呈し,諸家によ る新らしいCyrano解釈も相次いで発表された"が,それらを閲読すると,評家の 並々ならぬ努力に敬意を表することにやぶさかではないけれども, Cyrano研究 に関しては、まだまだ細かい細部のつみ重ねが必要な段階ではなかろうかとい う感がつよい、さまざまな要素のからまり合って複雑な総体を形づくっている L'Autre Monde については、とくにそのことがつよく云えるのであって、多種 多様な異質の思想やイメイジの各々の出所由来を,またそれぞれの微妙な照 応、対比や全体との関連などを一つ一つ掘り出していく根気強い作業なしに は、せっかく呈示された輝かしい全体像も、恣意的な一人合点におわるおそれ がある. この点注目に値するのは、とくに sources の面で新らしい発見や正 確化をもたらした Alcover 女史の地味な労作であるが、 そこにも当然のこと ながら不正確や誤りや追求の不足が見られるし、またいまだに出所不明の箇所 も少なからずのこっている. そこで今回はまず手始めにCyrano と Descartes の関係を、それも *L'Autre Monde* における Descartes の影響という点にし ぼって調べてみることにした.

ここで Descartes の影響からはじめることにしたのには、大した理由があるわけでもないが、baroque の文人哲学者、burlesque の名手、≪visionnaire≫、≪imaginaire≫Cyrano が、デカルト的合理主義にどのような反応を示すかはそれ自体として興味を唆られる問題だし、それにまた Descartes と同時代と

の関係の究明は、Corneille や Racine や Molière らにくらべて、また Pascal と比較しても大へんおくれていて、≪Corpus Cartesianum≫などは到底のぞ むべくもないので,その点を多少とも明らかにできたらと思うのである. Cartésianisme がようやく浸滲しはじめた 1660年代以前については殊に手薄であ って、Descartes のことに触れた文献にはあまりお目にかからないが、しかし 一方 Cyrano の言葉を借りると, Descartes は ≪fameux philosophe de notre temps≥² なのである. そして, 1650年前後に書かれ, 1657年と1662年 に世に出た L'Autre Monde は、Descartes の思想がそのなかに影をおとした おそらく最初の文学作品, Descartes その人が登場するほとんど唯一の作品と いってよく、そのいみでも、この方向からこの作品に光をあてるのもまた一興 ではないかと思われる. ところで Descartes との関係を論じるに当って問題 になるのは、L'Autre Monde を構成する Estats et Empires de la Lune と Estats et Empires du Soleil という2つの作品の相違,とくに思想的な相 違であり、これに関しても種々異った解釈があるが、ここではそれについては できるだけ触れないで, まず Cyrano がこの2つの作品の中で Descartes か ら直接とったと思われるもの,Descartes の作品以外から借用することがまず ありえないと思われるものがどれだけあるか、どれとどれかをはっきりさせる ことにしたい. 以下その具体的な調査に入るが、この問題にも長い研究の歴史 があるので、最初にこれまでの諸家のさまざまな意見を一応整理しておく必要 があろう. 明確な見解を表明していない評家(たとえば Mongrédien 氏³)) に ついては触れない.

研究の歴史 まず古いところで Paul Lacroix は、それまで gassendiste だった Cyrano が *Estats et Empires du Soleil* (以下 *Soleil* と略記する) では cartésien になったと主張する⁴⁾. Lachèvre もこれにしたがっているようにみえる⁵⁾. この説をさらに押進めたのは Vartanian 氏であって、同氏は *Estats et Empires de la Lune* (以下 *Lune* と略記する) がはっきり Gassendi の教えを 反映しているのにたいし、 *Soleil* はその ≪inspiration≫ を「完全に」 wholly, Descartes から得たとまで極言している⁶⁾. 以上を「Cyrano=

cartésien」派とすれば、これと鋭く対立するのは Spink 氏であって、二つの 空想旅行記には Descartes の影響はみられず, たまたま Descartes の説と矛 盾しない思想があっても、それは当時の科学者の ≪lieux communs≫ にす ぎないと主張する". それほど極端な否定ではないが、Soleil の分析でさまざま な箇所の新らしい sources として Descartes をあげながらも,「だが Cyrano は *L'Autre Monde* において Descartes の体系の 信奉者だったことは一度も なかった」と結論する Alcover 女史® も「Cyrano 非 cartésien」派に加え てよかろう. 最後に Harth 女史は両者の中間ともいえる立場であって, Lune では gassendiste だった Cyrano が, Soleil では, Descartes 説を知って両 者のあいだで躊躇し、論を斗わせ、態度を決定していない段階にあり、一そう 決定的に Descartes 説に傾いているのは Fragment de Physique において であると考える⁹ (この作品については のちに のべる). このように Cyrano と Descartes の関係というこの問題では Cyrano cartésien 説,非 cartésien 説、中間派と意見が分かれ、しかも肯定にも否定にも、それぞれさまざまに程 度の相違がある.したがってこのデリケートな問題に近ずくためには,できる かぎり先入見を捨て去り、texte の詳細、綿密な分析や比較をおこなうことが 必要とされるだろう、以下具体的な検討に入ろうと思うが、その前にさっきー 寸登場した Fragment de Physique をめぐる問題の所在について簡単に触れ ておかなければならない. Cyrano と Descartes の 関係というテーマの検討 には、この Fragment de Physique の問題を避けて通ることができないから である.

Fragment de Physique Cyrano 急死の5年後,1662年に Les nouvelles Oeuvres de Monsieur de Cyrano Bergerac と題する一本が上梓されたが、それには Soleil、若干の手紙および Entretiens pointus の他に Fragment de Physique なる未完の作品が含まれていた。 Paul Lacroix 版著作集でわずか28頁10,1741年版著作集でも12折本52頁11のこの小品は、Jacques Rohaultの作と推定されている短い préface につづいて、完成のあかつきには3部trois parties 以上にもなったであろう全体の「詳細目次」 Idée générale de

la physique および冒頭の 7 章とからなっていた。この未完の作品の内容が, 9 年後の1671年に出版された Rohault の $Trait\acute{e}$ de Physique と酷似していることを最初に発見したのは Lacroix だったが,かれはこの類似から,Rohault がその敬愛する友人 Cyrano を模倣したものと推測し 12 ',Brun もこれにしたがった 13 '。その後1921年に Lachèvre が両者の関係を逆転し,「軍人が専門の学者に教えを垂れるものではない」と正当にも判断して,模倣したのはCyrano の方であると結論した 10 。以後最近の Alcover 女史にいたるまで,この2 点,すなわち Cyrano の作品が Rohault のそれに極めてよく似ていること,この点で教えを垂れたのは Cyrano でなく Rohault の方であることの2 点は一般に承認されている 15 .

ところが Rohault は人も知る cartésien のチャンピオンだから話はややこ しくなる. 先程の Cyrano cartésien 派にとってこれはさしたる問題ではない. この作品と Cyrano の他の作品,とくに Soleil とのあいだに矛盾はないばか りか、むしろこの小品の存在は、Cyrano cartésien 説を確認するための重要な 証拠でさえある16). また中間派の Harth 女史なども, だんだん cartésien に 変貌していった Cyrano がもっとも Descartes に近づいた段階を示したもの として,大いにこれを利用している¹⁷⁾. これに反して Cyrano 非 cartésien 派 にとって事は重大であって、たとえば Spink 氏は Cyrano が一時期 Rohault の影響を受けた可能性のあることは認めながらも, Fragment が Cyrano の 他の作品とは、したがって他の作品の解釈には、ほとんど何の関係もないと主 張する180し、Alcover 女史にいたっては、L'Autre Monde の解釈にあたって この作品を全く無視し、それが Cyrano の作品であることにさえ 疑いをはさ んでいる¹⁹⁾. 片々たる小品であるが、このような見解の対立、解釈の相違があ る. 詳しくは次稿で論じることになるが、以上を考慮においた上で、いよいよ L'Autre Monde に cartésianisme の影を探すという具体的な作業に入ること にしよう(引用は Lachèvre 編 Les Ouvres libertines de Cyrano de Bergerac, 1921, tome I により, 以下頁数のみを示す).

Estats et Empires de la Lune まず第一作 Lune であるが、この作品に Descartes の影響の跡を指摘した評家はないし、また筆者自身が調べたかぎりではなさそうである。そればかりか、いくつかのテーマでは Descartes と真向から対立する説明がなされている場合もある。たとえば彗星の説明(p. 50)がそうだし、月の国の女王に飼われているスペイン人が物語る真空肯定論 (p. 45以下)も、月の国の Académiciens がのべるアトムの肯定論も、火のアトムが原動力となって宇宙の万物が形づくられる論も、アトムによる五官の働らきの説明も(p. 78以下)そうである(詳しい説明は紙数の都合で省略する。真空論義については、あとでもう一度問題にする)。

Estats et Empires du Soleil そこでいよいよ **Soleil** だが、この作品の中で **Descartes** の影響が指摘されている 箇所は 5 つある. その一つ一つを順次検討していこう.

(a) icosa idre Cyrano は、幽閉されていた塔の上から逃げ出すために奇天烈な器械を製作する。三尺四方、高さ六尺の箱で、天井と床に穴をあけ、やはり上下に穴をあけた大きいクリスタルガラスの二十面体 icosaèdre を天井の穴にとりつけると、太陽光線に照りつけられた透明な二十面体の中で空気が熱せられて上の穴から逃げ、空虚が生じる。その空虚を満たそうとして、箱の下方からおそろしい勢で空気が吹きてみ、器械全体を押し上げ、かくて箱の中に坐った Cyrano は天空高く持ち上げられる…

Le reste ne me surprit per car j'avois bien préveu que le vuide qui surviendroit dans l'icosaëdre à cause des rayons du soleil par les verres concaves, attireroit, pour le remplir, une furieuse abondance d'air dont ma boiste seroit enlevée; et qu'à mesure que je monterois, l'horrible vent qui s'engouffreroit par le trou ne pouroit s'élever jusqu'à la voûte qu'en pénétrant cette machine avec furie, il ne la poussât en haut (pp. 123-124).

この icosaèdre を動かす原理が「真空嫌悪」であることをはじめて指摘したのは有名な科学史家 Duhem である²⁰⁾が、Duhem はまたこの点で Cyranoが Descartes の影響を受けたとしている。 これにたいして Alcover 女史は

Baillet の,Descartes は1638年来真空嫌悪を軽蔑していた云々の条りを引用して,この点で Descartes の影響を受けたことはありえないと一蹴している 21 が,しかし Descartes も,たとえば1633年執筆の 22 のであって,間題は女史の考えている以上に複雑だと思われる。Baillet は Descartes が Galilée の 21 のではあるが,それにしても Baillet という他人の,しかも死後40年以上も経て書かれた伝記の一節だけでもって片附けるのは軽率に過ぎるので,1655年までに出版された Descartes の著作の中で真空の問題に言及した箇所,とくに 21 のでれ (11 ,5 et 16—19) が,Descartes を真空嫌悪支持派と誤解しうるような説明を含んでいないかなどについて,精密な分析をする必要があるのではなかろうか.だがそれはそれとして, 21 の時期,つまり 21 のよる真空実験の後でも真空嫌悪説はむしろ多数意見だったろうから,この点で 21 Descartes の影響を云々するのが見当違いであることだけは明白である.

(b) 宇宙の創成,天体の誕生と惑星の運動,太陽系の歴史 さて Cyrano の器械はどんどん上昇をつづけ,月,金星,水星のそばを通って太 陽 に 近 づ くが,これらを観察しながら,かれは「この大きい宇宙の組立てられた原因」について瞑想する.そして神が物質を創造し,その「混沌を整理されたとき」,「未知の愛なる原理」によって同類が同類とむすびつき,空気やさまざまの恒星,惑星がつくられたいきさつ,惑星が恒星のまわりをまわる原因をのべ(以上を前段とよぶことにする),つぎに太陽をめぐるさまざまの惑星がかつては太陽であったこと,また太陽もいつかは地球同様「不透明な球」になることは必定であり,その証拠は太陽の表面に形成される外皮 crouste, つまり黒点であることなどを説明する(以下を後段とよぶことにする).

Resvant depuis aux causes de la construction de ce grand Univers, je me suis imaginé qu'au débroüillement du Cahos, après que Dieu eut créé la matière, les corps semblables se joignirent par ce principe d'amour inconnu, avec lequel nous expérimentons que toute chose cherche son pareil. Des particules formées de certaines façons s'assem-

blèrent, et cela fit l'air; d'autres à qui la figure donna possible un mouvement circulaire, composèrent en se liant les globes qu'on appelle Astres, qui, non seulement à cause de cette inclination de pirouetter sur leurs pôles, à laquelle leur figure les nécessite, ont dû s'amasser en rond, comme nous les voyons, mais ont dû mesme, s'évaporant de la masse, et cheminant dans leur fuite d'une allure semblable, faire tourner les orbes moindres qui se rencontroient dans la sphère de leur activité. C'est pourquoy Mercure, Vénus, la Terre, Mars, Jupiter et Saturne ont esté contraints de pirouëtter et rouler tout ensemble à l'entour du Soleil. Ce n'est pas qu'on ne se puisse imaginer qu'autrefois tous ces autres globes n'ayent esté des Soleils, puis qu'il reste encor à la Terre, malgré son extinction présente, assez de chaleur pour faire tourner la Lune autour d'elle par le mouvement circulaire des corps qui se déprennent de sa masse, et qu'il en reste assez à Jupiter pour en faire tourner quatre. Mais ces Soleils, à la longueur du temps, ont fait une perte de lumière et de feu si considérable par l'émission continuelle des petits corps qui font l'ardeur et la clarté, qu'ils sont demeurez un marc froid, ténébreux, et presque impuissant. Nous découvrons mesme que ces taches qui sont au Soleil, dont les Anciens ne s'estoient point aperçeus, croissent de jour en jour. Or que scait-on si ce n'est point une crouste qui se forme en sa superficie. sa masse qui s'éteint à mesure que la lumière s'en déprend, et s'il ne deviendra point, quand tous ces corps mobiles l'auront abandonné, un globe opaque comme la Terre? (pp.127—128).

この説と Descartes との関係をはじめて指摘したのは Brun であるが、かれは漠然と黒点のことに触れ、Fontenelle の文章を引いたのみだった²⁴⁾. ついで Vartanian 氏が前段、後段を通じてこの 箇所に Descartes の影響が見られると主張したが²⁵⁾、最近の Alcover 女史は、前段に関しては Descartes の影響を否定する一方、後段については、それが Gassendi の見解と関係がないことを示して Descartes 由来説を一そう強めた²⁶⁾. Harth 女史も後段に Descartes の影響をみとめている²⁷⁾. まず前段の吟味からはじめよう.

Weber 氏はここの「原子が分離し、そして同様の性質をもつ原子が相集まる説」が Descartes ではなく古代原子論と一致していることを指摘し²⁸⁾、Alcover 女史は文中の≪chaos≫の語に注目して、≪chaos≫ からはじめるのが Lucrèce や Gassendi など原子論者の常道であったことを付加えて Descartes 影響説を否定し、さらにまた、神が物質を創造するというのもDescartes からきたというよりは、Cyrano の concession であろうと想像する. また同類相集まる理由に≪amour inconnu≫つまり一種の相互的 sympathie を云うのは Descartes ではもちろんなく、Lucrèce などでもなく、ルネサンスのnaturalistes の影響だろうと推定している²⁹⁾. これにたいして Vartanian 氏はこの箇所に Descartes の「渦動」vortex による宇宙創成説の片鱗を見るが、その主張の根拠はなんら明確に示されていない⁸⁰⁾.

ところで ≪chaos≫ からはじめて、原子の離合集散で世界の成立を説明す るのは、たしかに古代以来原子論の伝統である*10.しかし神が物質を創造し、 物質を無限の部分に分割し、それに運動をあたえることによって宇宙全体が生 成したというのが Descartes による説明でもあった³²¹. そして ≪chaos≫ な る語はたしかに Principes にはでてこない³³⁾が、Discours de la Méthode で は使われている³⁴⁾し、また Cyrano は後述(e)に引用の文章で明らかなように、 Descartes がその宇宙創成論を物質の ≪chaos≫ からはじめたと理解してい る*5)ので、この点からの反駁は問題にならない。また神による創造云々は、た しかに Alcover 女史のいうように、Cyrano の concession でもあろうが、し かし Descartes の説明を採ったのだと見ればこれもまた別に問題はない。 さ らに Soleil の他の箇所では ≪atome≫ なる語を使用することに躊躇しない Cyrano³⁶⁾が、ここでは Descartes と同様、≪corps≫、≪particule≫といっ て≪atome≫を使っていないことにも注目しなければならない。さらにもっと も重要なことだが、この前段の主要なテーマは、粒子の形状と運動による恒星、 惑星の生成および運動の説明であるが、古代原子論は、あるいはこれに明確な 説明をあたえていないか,あるいはこれをちがった原理で説明している³プ.こ れにたいして Descartes は、物質の粒子の形状と運動というこの原理によって、

それらすべてを十分に説明しているばかりか, Descartes の説明と Cyrano の敍述とのあいだには大きな類似がある. たとえばはじめの, ≪chaos≫ から 無限の粒子が分かれ、その粒子の「渦動」から天体が生成するという構想自体 が Descartes のものだし³⁸⁾, さらに細部に入れば, 天体がたまたま自分の圏 内に入ってきた小さい惑星を回転させるという説明(d'autres [particules]... ont dû mesme, s'évaporant de la masse et cheminant dans leur fuite d'une allure semblable, faire tourner les orbes moindres qui se rencontroient dans la sphère de leur activité) は, 惑星が太陽のような恒星のま わりを回転するのは、惑星を中心とする一つの「渦動」 tourbillon が破壊さ れて、その惑星が、太陽を中心とする一そう大きい「渦動」の中にまきこまれ たからだとする Descartes の説390 と矛盾しないし、さらに上記引用文中のイ タリック体の部分をみれば Descartes の渦動説に一そう近ずくように思われ る. Vartanian 氏は Cyrano のこの箇所を引用する際, このイタリック体の部 分を, 厄介と見てか, 省略してしまっている400が, ここを省略して, 漠然と, 恒星が小さい惑星を回転させるという趣旨だけをのこすならば、Cyrano の説 明はとくに Descartes 的でも何でもない. そうでなくて Cyrano のこの一見 不可解な敍述をできるかぎり無理なく 理解しようとすると, 「天体(の粒子の 一部)が天体の塊から蒸発して、同様の歩みぶりで(つまり同様に円運動をし つつ)逃げながら進み」・11 云々のうち、「天体の本体から蒸発した粒子」という 説明は Descartes 的ではないが、いまかりにこれを Descartes のいわゆる 第2元素 le second element, すなわち天空を満たしている第2元素ととれ ば、恒星を中心に回転している第2元素の渦動が、その中に惑星をまきこんで、 共に恒星のまわりを回転させるというイメイジは Descartes の説明からそう とおくないのである (Descartes との相違の意味はすぐあとでのべる).

もちろん この前段には Descartes 説から みれば おかしい点が いくつかをる. その最大のものは、Descartes が空虚 le Vuide の存在を否定するのに Cyrano が空虚肯定説を捨てていない点である. そのことはこの箇所では間接的にしか表われていないが、後述(e)で Cyrano は他ならぬ *Princi pes* のこ α

部分を槍玉にあげて、神が物質の ≪chaos≫ を無数の部分に分割してその各々に運動をあたえたとしても、もし空虚の存在を前提しなければ、それらが運動をはじめることは不可能であると主張して、Descartes の空虚否定説を攻撃している (p. 184). だから Cyrano がこの宇宙創成、天体の生成の敍述でDescartes の理論を借用したとしても、その場合 Descartes の空虚否定説まで受入れていないことはたしかである。そして、Descartes の空虚否定を受入れないで、しかも Descartes の宇宙生成、天体の生成の理論を受入れる、この奇妙な立場が Cyrano のここの敍述にも反映している。前頁の引用文のイタリック体の部分がそれであって、惑星が恒星のまわりを回転する理由を、天空をうずめ、恒星を中心に渦動する第2元素の働らきによって説明する Descartes に賛成し、なおかつ空虚の存在を肯定するとすれば、Cyrano がここで書いているように、空虚な天空の中を、恒星から発する粒子が渦動しながら惑星をひっぱってまわると考えざるをえず、そう解すれば Cyrano のこの表現が、かなり無理なく理解できるように思われるのである。

Descartes 説との相違についてさらに付加えるならば、Cyranoによると、「両極を軸にして回転する」と同時に円を描いて運動する粒子が集まって、円い「天体」Astres をつくるのであるが、Descartes によれば、そのような運動をするのは、天体をつくる粒子、つまり Descartes のいう第1元素 le premier element ではなくて、主として、それより大きくて、天空を満たすところの第2元素なのであり⁴²⁾、また天体の生成は、Cyranoがここでのべるように、天体をつくる粒子自体とその運動が原因なのではなくて、渦動 tourbillon を描いて回転する第2元素の運動の結果、渦動の中心に生じた空隙を第1元素が満たすことによるのだった⁴³⁾し、さらに天体が円いのは、天体をつくる粒子自体の形と運動のためではなくて、天空を満たして渦動する第2元素が、その「渦動の中心から遠ざかろうとする傾向」をもつためだった⁴¹⁾。さらにまた Cyranoが、同類同志を結びつける原因として、「未知の愛なる原理」という、Descartesの思想とはまったく相容れないanimisteな原理を導入していることも注目に値する。これについては後にもう一度触れるが、こういう風にみてくると、Cyrano

がこの前段でDescartes の理論のつよい影響をうけていることは疑いないが、 しかしそれをそのままうのみに受入れて盲従しているのでなく、自分の考えと 矛盾しないところだけをとりいれ、それと抵触するところは巧みに修正し、大 いに自主性を発揮しているとみてさしつかえないだろう。

ではつぎに後段はどうだろうか、太陽系の歴史に関するこの壮大な仮説は果 して Descartes の独創だろうか.1610年の太陽の黒点発見は incorruptibilité des cieux という数千年の通念をゆるがして人々に深刻な衝撃をあたえたが, そこから、太陽の黒点が発達すれば、やがて太陽も「不透明な球」 になると いう大胆な着想、さらにまた、われわれの生息している地球は「小さい太陽」 であり,地球の表皮はいわば太陽の黒点の堆積にほかならず,地球の中心には 太陽をつくる物質が今なお存在しているという奇想天外な仮説までの距離は相 当なものであって,たしかに飛躍的といってよく,たとえば Cyrano も読んだ らしい Bruno は、黒点発見以前に殺されているにもかかわらず、太陽の黒点の 存在を予感したが、それは「地球に火の諸部分があるように、太陽にも水の諸部 分がある」ためだと考え、太陽も地球も同じ物質で構成されていると推論する にとどまった450 し、Cyrano が愛読したという Campanella にも、また Galilée にも、この大胆な着想はないようである46. Cyrano に大きい影響をあたえた Gassendi にこの仮説の存在しないことは、先に触れたように、Alcover 女史 がすでに指摘している⁴7'. そしてこの説が Descartes の独創であり新機軸で あることは科学史の通説らしい⁴⁸¹ので、今の段階では Descartes の天才的な 想像力の産物と考えておこう49°. そして Cyrano はここでは、前段とちがって 何の留保もなく全面的に Descartes に追随しているとみてよい⁵⁰¹が、Cyrano のこの態度を, 天才の大胆で奇抜な想像力にたいする全幅の共鳴と考えたい. しかもこの Descartes の未来ある着想が、18世紀末に再びとりあげられるま で百数十年間, 捨ててかえりみられなかったことを思えば, Cyrano のこの adhésion は一そう特筆に値すると思われるのである. そうして前段, 後段を通 じての主題、すなわち太陽系を含めた宇宙の生成と歴史という重要な主題に関 して Cyrano が発言しているのは, L'Autre Monde 全体の中でもここだけであ

ることを思い,後述(e)でのべられている Descartes 讃辞のなかで,Descartes の自然学のすぐれたところとして,何よりもまず「美しく,すばらしい宇宙の構造の解明に資した」 511 点が強調されていることを思えば,この(b)の部分における Descartes の影響は相当に重視していいのではないかと思われる. だがこれについては,その影響の意味をも含めて,のちにもう一度触れることにして,これでひとまずこの項を終りたい.

(c) 血液の循環 ますます太陽に近ずくにつれて Cyrano の体は透明になり、かれは自分のさまざまな内臓が鮮かな「自然の色」を保って動いているのを見ることになる。すなわち

mes poulmons conservoient encor sous un rouge incarnat leur mole délicatesse; mon coeur toûjours vermeil balançoit aisément entre le sistolle et le diastolle; mon foye sembloit brûler dans un pourpre de feu, et cuisant l'air que je respirois continuoit la circulation du sang ... (p. 135).

Alcover 女史はここで Cyrano が「Descartes の意見に組している」と見る 520 が,それは一体どういうことだろうか.「肝臓が血液の循環をつづけている」などという主張は Cyrano 以外のだれのものでもない. いまかりに 百歩ゆずって「肝臓」を「心臓」と読みかえ,心臓が血液の循環をつかさどると読みかえるとしても, 衆知のごとく 血液循環論者 = cartésien とはいえないのであって,心臓を一種の吸上げポンプと見る Harvay らと,心臓を「光のない火」 530 をもった熱機関と考え,血液の循環は心臓の熱による血液の膨張の結果だと考える Descartes とが対立していた. Alcover 女史もそのことは知っており,Bernier の文章などを引用しているが一向に判然としない. また上掲引用文中の《cuisant l'air que je respirois》を女史はわざわざ souligner しているけれども,心臓が熱をもっていることはスコラ以来の旧医学の通説であり,この通説をそのまま採用したからこそ Descartes は誤ったのであって 540 ,これがとくに cartésien だということはもちろんできない. また心臓が「空気を煮る」という説は Descartes にはない.呼吸する空気を心臓が煮(coction)て,「生命力」 esprits vitaux に練りあげるというのもスコラ以来の旧医学の

伝統的な説明であるが、これは Descartes には採用されなかった 55 . このあ たりといい, また心臓でなく肝臓を生命保持の中心と考えている点といい, Cyrano の生理学に関する考えはむしろ大へん古臭いのである. あとの点につ いて付加えると、上掲引用文の少し前で Cyrano は、 人間が泥から太陽の熱 による3回の「煮こみ」coction によって誕生するさまを「黒点人」に語らせ ている(pp. 130-131)が、それによれば、第1回の「煮こみ」がおこなわれる 場所は肝臓であり、第2回目が心臓、第3回目が脳なのであって、それはまた 植物的霊魂,動物的霊魂,人間の霊魂というあの古来の区別に対応させられて おり、ここでも通説を一歩も出ていない。これに反して Descartes は、新らし い数々の観察によって、胎児の体内に最初に形成されるのが、肝臓ではなくて 心臓であることを確認し、この事実にもとづいてかれの独創的な生理学を築い たのだった⁵⁶⁾. こういうわけで Alcover 女史指摘の箇所には cartésianisme の片鱗も見出せないのであって、ここでの Cyrano は古い医学説と、おそらく じりの聞きか新らしい血液循環説とを混合し、しかもうまくこねあげそこなっ たと評すべきだろう. なお女史は Gassendi が肝臓に「生物学的機能の中心」 をおいたことを指摘しているが、たしかに女史の指摘通り、1627年の Gassendi はそうであったかもしれないけれども、晩年にはかれもまた心臓による血液循 環説に傾いている570ととを、この大学者の名誉のために付加えておこう.

(d) 極は天の口 鳥の国で裁判にかけられ、死刑を宣告された Cyrano は特別の赦免によって危く一命をとりとめ、森をさまよううち木の国に入る. そこで Dodonne のかしの木から「愛人木」 Arbres amans の話を聞くが、その長い博識な話の一環として、鉄と磁石のことが物語られ、磁石が極に向かう理由を説明するために、「極とは天の口」であって、太陽が地球にまき散らした「光」、「熱」、「火性の小物体」、「生命の小物体」、「魂」(これらすべては同じものとみなされている)を回収する「風窓」 Soûpiraux であり、こうして物質である魂が、天と「この宇宙のすべての球体」とのあいだを永遠に循環するのだと説明される.

Les Pôles sont les bouches du Ciel par lesquelles il reprend la

lumière, la chaleur et les influences qu'il a répanduës sur la Terre; autrement, si tous les trésors du Soleil ne remontoient à leur source, il y auroit longtemps (toute sa clarté n'estant qu'une poussière d'atômes enflâmmez qui se détachent de son globe) qu'elle seroit éteinte et qu'il ne luiroit plus, ou que cette abondance de petits corps ignés qui s'amoncèlent sur la Terre pour n'en plus sortir l'auroient déjà consommée. Il faut donc, comme je vous ay dit, qu' il y ait au Ciel des soûpiraux par où se dégorgent les replétions de la Terre, et d'autres par où le Ciel puisse réparer ses pertes, afin que l'éternelle circulation de ces petits corps de vie pénètre successivement tous les globes de ce grand Univers. Or les soûpiraux du Ciel sont les pôles par où il se repaist des âmes de tout ce qui meurt dans les Mondes de chez luy, et tous les Astres sont ses bouches et les pores par où s'exhalent derechef ses esprits (pp. 175—176).

この箇所に Descartes の影響をはじめてみとめたのは Alcover 女史であ って、女史はこの箇所の sources として Bruno, Epicure と並んで Princi pes をあげている⁵⁸⁾. それを整理すると, まず Bruno は De Immenso において, 太陽が、その火や光としてまき散らした養分を回収すると説くが、その回収の 手段は,大洋が,蒸発によって失った水分を,川からの流入と雨によって回復 するといった比喩などで説明されており,Cyrano の文章とは程遠い⁵⁵゚.つぎ に Epicure は原子が「風窓」soupiraux のような出入口を見出して, 世界のあ いだを出入するとのべているそうで、これが事実だとすれば、Cyrano と大分 近くなる 60 . しかし「極」 \mathbf{p} $\hat{\mathbf{o}}$ le が登場するのは,ほかでもない Principes で あり、*Principes* 以外にはない. そしてまた Descartes が極をもちだしたのも Cyrano と同様,磁石の性質を説明するためであった.すなわち Descartes に よれば,三つの溝をもった2種類の「有溝微小部分」partie canulée が,一方は 北極を中心とする北半球から南極を中心とする南半球へ,他方は南極を中心と する南半球から北極を中心とする北半球へと、両極を結ぶ軸に平行に地球を貫 いて流れたのち、それぞれ空気中を通って元の場所へ戻るという循環運動をす るはずであり、これによって磁石のもつさまざまな性質が説明される611. さら

に一部の「有溝微小部分」は、地球を貫いて空気中に出たのち、赤道のはるか上方あたりから再び天に戻るとされている 63 . Cyrano との類似は一目瞭然であり、かれがここで Descartes からヒントをえたことも明らかであるが、そのことは同じ Soleil の別の箇所によっても確かめることができる. Soleil の冒頭で、月から帰った Cyrano は、sorcier とみなされて、Colignac 村の司祭に煽動された 百姓共につかまるが、百姓どもがたまたま Cyrano のもっていた本の一冊を開けたところ、それが 《la Physique de monsieur des Cartes》 であり、開けた頁が、たまたま「磁石の性能を説明する」奇怪な「ひきがえる」 crapaud のような絵だったからである 63 . しかも Cyrano は Cussanの城に一月ばかり滞在するあいだの読書のためにと、この Principes をたずさえていたのだった 64 .

このように Cyrano が *Principes* からこの奇抜なアイディアを借用したことは明らかだが、しかしそれにもかかわらず、両者のあいだにはまた少なくとも 2つの注目すべき相違がある. まず Descartes では、前述のように「有溝微小部分」が出入するのは、北極または南極にかぎらず、ひろく北半球と南半球の全体であった 65). ところが Cyrano ではそれは「極」であり、「極」にかぎられている. またそれに付加えていえば、Descartes では、極から出た「有溝微小部分」の一部が天に戻るのは、地球を大きくまわって、ちょうど地球の赤道のはるか上方あたりからだった 66 が、Cyrano の文章から受けるイメイジでは魂がそんなまわり道をするとは考えられず、極を出たのちまっすぐ直接に天に舞戻るのである. これらは Cyrano の曲解か、あるいは故意の焼直し、おそらく後者であって、Descartes のこの箇所の説明に頻りに繰返される《 \mathbf{pole} 》の語に印象を受け、Descartes の説明を借用しながらそれを一そうファンタスティックにし、「極は天の口」という一そう奇抜な説をつくり出したのであろう.

第2の、もっと重要な相違点は、極から出入するという物質の性質である。 Descartes の「有溝微小部分」は3種の元素のうちもっとも細かい第1元素 悪評の高い「微細な物質」matière subtile がすなわちこれである一に属し、

そのうちではもっとも大きいものとされている60. 磁石の性質を説明するため にのみ考案されたような681,形からいってもまったくファンタスティックな代 物である600が,しかしその働らきは,他の元素と同様まったく機械的であり, 意志や感情などをもたないことはもちろん,他から動かされることなしには決 してみずから動かない. Descartes の物体 corps の概念からして当然である. こ れにたいして Cyrano の物質は「火性の小物体」 petits corps ignés, 「生命の 小物体」petits corps de vie であり,「魂」であって,太陽から発して動植物, 人間をつくった「魂」が、そのものの死滅と共にふたたび古巣に戻り、「粗大 な物質から 清められて, あの大きな 完全な動物である 太陽の血となり生命力 esprits vitaux となる $|^{70}$. ここには16世紀のイタリア・ルネサンス思想と共 通な animiste 的発想が明らかであって、 それはまた Soleil を通じて流れる ライトモティーフでもある. こうしてこの点でも Cyrano は Descartes のア イディアは借用しながら中味はまったくすりかえて、自分の哲学の敍述にうま く利用している. 事実 Cyrano は光, 熱,「魂」が, 太陽から発して万物を生 かしたのち, ふたたび太陽に戻るという思想は繰返しのべながら, 「魂」が太 陽に戻る手段になると、いつも炎のように立昇るほか能がなかったが、かれが Principes に見出した「極は天の口」の着想は、この欠陥を補完する格好の材 料だったのである.

*

以上 Soleil の中で Descartes と関係があるといわれる 5 つの箇所のうち (a), (b), (c), (d)の 4 つの吟味を終えたが,紙数の都合で,もっとも重要な最後 の (e) Cyrano と Campanella の <math>Descartes 論争 と暫定的結論, つまり Cyrano cartésien と いう当面の問題について,<math>L'Autre Monde の分析から ひきだすことができるかぎりでの結論は,次号にまわさざるをえなくなった. このような尻切れとんぽの形で本稿を了えることに御海容を請う次第である. なお次稿に引続き,はじめに触れたように,Fragment de Physique の分析に入る予定であり,それが完結してはじめて Cyrano cartésien の問題に決定的な結論を下すことができるはずである. 前途はまだなかなか遼遠といわなければならない.

- 1) たとえば E. Canseliet, Cyrano de Bergerac, philosophe hermétique, Les Cahiers d'Hermès, I (1947), pp. 65-82.
 - A. Adam, Histoire de la littérature française au XVIIe siècle, tome II, 1957.
 - A. Lavers, La croyance à l'unité de la science dans L'Autre Monde, Cahiers du Sud, 47 (1958), pp. 406-416.
 - L. Erba, L'incidenza della magia nell'opera di Cyrano de Bergerac, Contributti del Seminario di Filologia moderna. Serie francese, I (1959), pp. 1—74.
 - J. S. Spink, French Free Thought from Gassendi to Voltaire, 1960 (traduction française, 1966).
 - A. Adam, Les libertins au XVIIe eiècle, 1964.
 - Ch. Liger, Les Cinq Envols de Cyrano, La Nouvelle Revue Française, 1965, pp. 242 -256 et pp. 427-442.
 - E. W. Lanius, Cyrano de Bergerac and the Univers of the Imagination, 1967. Erica Harth, Cyrano de Bergerac and the Polemics of Modernity, 1970.

Madeleine Alcover, La pensée philosophique et scientifique de Cyrano de Bergerac, 1970.

また éditions としては

L'Autre monde, publié par Henri Weber, Editions sociales, 1959.

Les Etats et Empires de la Lune et du Soleil, publiés par Claude Mettra et Jean Suyeux, J.-J. Pauvert, 1962.

Voyage dans la Lune, publié par Maurice Laugaa, Garnier-Flammarion, 1970. Lettres, publiées par Luciano Erba, Milano, 1965.

- 2) Lachèvre, Les Ozuvres libertines de Cyrano de Bergerac, 1921, tome I, p. 183.
- 3) Mongrédien, Cyrano de Bergerac, 1964, pp. 202-203.
- 4) Cyrano de Bergerac, Histoire comique des Etats et Empires de la Lune et du Soleil, p.p. P.L. Jacob, Bibliophile (すなわち Paul Lacroix), 1858, Réédition, 1962, p. 36 et p. 329 note 2.
- 5) Lachèvre, op. cit., p. XCIX note 2 et pp. 1-2.
- 6) Vartanian, Diderot and Descartes. A Study of Scientific Naturalism in the Enlightment, 1953, p. 56.
- 7) Spink, La libre pensée française de Gassendi à Voltaire, 1966, pp. 81-82.
- 8) Alcover, op. cit., p. 146.
- 9) Harth, op. cit., p. 99 sqq. とくに pp. 101—103 et pp. 107—108. なお Weber 氏も「Cyrano は gassendiste から, だんだん cartésien の列にうつっていった」とみている (Cyrano de Bergerac , L'Autre Monde, p.p. Weber, p. 16) から,

- 同氏も Harth 女史と同じ意見とみることもできるが、それが $Fragment\ de\ physique\ を含めての解釈なのか、 <math>L'Autre\ Monde\$ のみを問題にしているのかはっきりしないから、ここではとりあげない。
- 10) Cyrano de Bergerac, Histoire comique..., p.p. Jacob, pp. 353-380.
- 11) Les Oeuvres diverses de Monsieur Cyrano de Bergerac, Jacques Desbordes, Amsterdam, 1741, tome second, pp. 338-389.
- 12) Cyrano de Bergerac, Histoire comique..., p.p. Jacob, p. 352 note 1.
- 13) Brun, Savinien de Cyrano Bergerac. Sa vie et ses œuvres d'après des documents inédits, 1893, p. 324.
- 14) Lachèvre, op. cit., p. XCIX note 2 et p. 2.
- 15) ただ唯一の例外は Harth 女史であって、女史は *Fragment de physique* と Rohault との類似はみとめながらも、この作品の中に Cyrano の独創性をいろいろ見出そうとしている(たとえば Harth, *op. cit.*, pp. 103—104). これについては次稿でのべる.
- 16) Vartanian, op. cit., p. 56.
- 17) Harth, op. cit., pp. 107-108.
- 18) Spink, op. cit., pp. 81-82.
- 19) Alcover, *op. cit.*, p. 19. なおこの疑念は, Cyrano cartésien 派に一応数えられる Lachèvre によってもすでに提出されていた (Lachèvre, *op. cit.*, p. XCIX note 2 および Cyrano de Bergerac, *L'Autre Monde*, p.p. Lachèvre, Garnier, 1933, p. 302 note 20).
- 20) Duhem, Histoire des idées aéronautiques avant Montgolfier, 1943, p. 367.
- 21) Alcover, op. cit., p. 98.
- 22) Descartes, *Oeuvres*, A. T., tome XI, p. 18. Cf aussi Descartes, *Oeuvres philoso-phiques*, éd. Alquié, tome I, p. 332 note 1.
- 23) Baillet, La Vie de Monsieur Des-Cartes, II, p. 212.
- 24) Brun, op. cit., p. 302.
- 25) Vartanian, op. cit., pp. 56-57.
- 26) Alcover, op. cit., pp. 101-103.
- 27) Harth, op. cit., pp. 77-78.
- 28) Cyrano de Bergerac, L'Autre Monde, éd. Weber, p. 200 note 1.
- 29) Alcover, op. cit., pp. 101-102.
- 30) Vartanian, op. cit., pp. 56-57.
- 31) たとえば cf. Epicure, Lettre à Hérodote, 73—74 et Lettre à Pythoclès, 88—91; Lucrèce, De la Nature, V, 416—508.
- 32) たとえば Les Principes de la Philosophie, III, 46. Quelles sont ces suppositions

参照.

- 33) そればかりか Principes では Descartes はむしろ太初の 《chaos》 に否定的である。《bien que ces loix de la nature soient telles, qu'encore mesme que nous supposerions le Chaos des poëtes, c'est à dire vne entiere confusion de toutes les parties de l'vnivers, on pourroit tous-jours demonstrer que, par leur moyen, cette confusion doit peu à peu reuenir à l'ordre qui est à present dans le monde... toutefois, à cause qu'il ne conuient pas si bien à la souueraine perfection qui est en Dieu de le faire autheur de la confusion que de l'ordre, & aussi que la notion que nous en auons est moins distincte, j'ay creu deuoir icy preferer la proportion & l'ordre à la confusion du Chaos...》 Principes, III, 47. Que leur fausseté n'empesche point que ce qui en sera déduit ne soit vray.
- 34) «Apres cela, ie monstray comment la plus grande part de la matiere de ce Chaos deuoit, en suite de ces loix, se disposer & s'arrenger d'vne ceraine façon qui la rendoit semblable a nos Cieux», A. T., tome VI, p. 43.
- 35) ≪il [Descrates] a étably pour commencement des choses un cahos de matière tout à fait solide, que Dieu divisa en un nombre innombrable de petits carreaux...≫, (p. 184).
- 36) たとえば、後述(d)、本稿32頁の第4行参照.
- 37) たとえば cf. Epicure, Lettre à Hérodote, 76-80 et Lettre à Pythoclès, 90-93; Lucrèce, De la Nature, V 509-533.
- 38) たとえば *Principes*, Ⅲ, 46 *Quelles sont ces suppositions* 参照. なお *Principes* で 盛に活躍する≪tourbillon≫なる語が説明付ではじめて登場するのもこの章である.
- 39) Cf. Principes, II, 140. Comment les Planetes ont pî commencer à se mouvoir et III, 146. Comment toutes les planetes peuvent avoir esté formées.
- 40) Vartanian, op. cit., p. 57.
- 41) 「逃げながら進み」は, 円運動をする粒子はたえず渦動の中心から遠ざかろうとする という Descartes の説明と一致する(cf. *Principes*, Ⅲ, 58. *Comment il* [un corps] tend à s'éloigner du centre autour duquel il se meut 以下).
- 42) Cf. Principes, III, 46. Quelles sont ces suppositions.
- 43) Cf. Principes, ∭, 54. Comment le Soleil & les Estoiles fixes ont pî se former.
- 44) Cf. Principes, Ⅲ, 61. Que cela est cause que les corps du Soleil & des Estoiles fixes sont ronds.
- 45) P.-H. Michel, La cosmologie de Giordano Bruno, 1962, p. 222.
- 46) たとえば Galilée は、Alcover 女史の指摘した Gassendi の場合 (Alcover, op. cit., p. 102) と同様、太陽の黒点を雲のごときものと考えている. ≪Des masses

très grandes qui, en des temps très courts, se produisent et disparaissent, qui durent plus on moins longtemps, qui se distendent et se condensent, qui facilement changent de figure, qui sont en certaines parties denses et opaques, et en d'autres le sont moins, de telles masses ne ressemblent à rien d'autre près de nous qu'aux nuages», La première lettre de Galilée à Welser du 4 mai 1612, traduite et citée par B. Dame dans son article: Galilée et les taches solaires (1610—1613), in Galilée. Aspects de sa vie et de ses œuvres, p.p. le Centre International de Synthèse, 1968, p. 208. \$\frac{1}{2}\$ cf. Maurice Clavelin, La philosophie naturelle de Galilée, 1968, p. 209.

- 47) Alcover, op. cit., p. 102.
- 48) Histoire générale des sciences, publiée sous la direction de René Taton, tome II, La science moderne, 1958, p. 198 et pp. 409-410.
- 49) なお Alcover 女史は、Descartes がこの仮説を最初にのべたのは1637年出版の Les Météores だといっている (op. cit., p. 102) が、これはもちろん1633年執筆の Le Monde のあやまりである.
- 50) なお付加えるならば Cyrano は Descartes の理論に大筋において従っているだけでなく、Cyrano の敍述は甚だ簡単であるが、両者の類似は細部にまで及んでいる。たとえば Cyrano はここで太陽の黒点の生じる原因について、それが、光と熱の小粒子がはなれたあとにのこった、不透明な動かない塊で形づくられると考えているが、同じ説明は Principes にもある(III、94. Comment elles [les parties canelées] produisent des taches sur le Soleil ou sur les Estoiles). だがこれについては、Alcover 女史が Principes の原文を引用して指摘している (op. cit., pp. 102—103) から、ここではこれ以上触れない.
- 51) «il (Descartes) a concouru à la belle et magnifique structure de cet Univers», (p. 184).
- 52) Alcover, op. cit., pp. 106-107.
- 53) «vn de ces feux sans lumiere», Disours de la Méthode, Cinquiesme Partie, A. T., tome VI, p. 45.
- 54) Gilson, Descartes, Harvey et la scolastique, in Etudes sur le rîle de la pensée médiévale dans la formation du système cartésien, 1930, pp. 82-83.
- 55) *Ibid.*, pp. 60-61 et p. 84.
- 56) Roger, Les sciences de la vie dans la pensée française du XVIII^e siècle, 1963, p. 144.
- 57) Sortais, La philosophie moderne depuis Bacon jusqu'à Leibniz, tome II, 1922, p. 177.
- 58) Alcover, op. cit., pp. 126-127.

- 59) P.-H. Michel, op. cit., p. 221.
- 60) Alcover 女史はここで Bernier の Abrégé のつぎの一節を証拠として引いている. «Les atomes, reprenant leurs premiers mouvemens, s'enfuiront et s'écarteront bien loin, ou tomberont bientost en d'autres mondes, ou concourront avec d'autres Atomes pour former de nouvelles masses; les premiers principes trouvants des entrées et des sorties, comme des espèces de soupiraux, entre les mondes... \gg , (2° partie, 1678, tome I, livre 1, ch. 6, pp. 97-98). しかしこれは Epicure の原文にはない. これにもっとも近い内容をもつと思われ るものは Lettre à Pythoclès のつぎの一節(89)であるが、ここにも ≪soupiraux≫ のようなピトレスクな語はない. ≪On peut aisément concevoir qu'il y a une infinité de tels mondes, et qu'un mnonde de cette espèce peut naître soit au sein d'un monde, soit au sein d'un intermonde ... Un tel monde est formé par germes appropriées qui affluent d'un ou de plusieurs mondes ou intermondes, et qui peu à peu s'ajoutent les uns aux autres, s'organisent, se déplacent et changent de lieu à l'occasion, reçoivent jusqu'à l'achèvement du monde commencé des courants d'atomes appropriés...», (traduction d'Ernout, in Lucrèce, De la Nature. Commentaire par Ernout et Robin, tome I, pp. XCI—XCⅡ). Gassendi に存在するかどうか詳かにしないが, も し存在しないとなれば、Cyrano の死後に刊行された1678年版の Abrégé が Cyrano の sources になりえないのことは明らかだから,Alcover 女史は Bernier を *Soleil* の sources として引用されるかぎりは、 Gassendi に直接あたって調査する労を 取られるべきであったと思われる.
- 61) Cf. Principes, IV, 133. Explication de la nature de l'aymant et IV, 146. Comment les parties canelées prennent leur cours au travers et autour de la Terre.
- 62) Cf. Principes, W, 147. Qu'elles passent plus difficilement par l'air & par le reste de la Terre exterieure, que par l'interieure.
- (ayant décousu le parquet, et au premier volume qu'ils [des villageois de Colignac] ouvrirent s'estant rencontré la *Physique* de monsieur des Cartes, quand ils apperceurent tous les cercles par lesquels ce Philosophe a distingué le mouvement de chaque planète, tous, d'une voix, heurlèrent que c'estoit les cernes que je traçois pour appeler Belzébut. Celuy qui le tenoit le laissa choir d'appréhension, et par malheur en tombant il s'onvrit dans une page où sont expliquées les vertus de l'aimant...≫, (pp. 108—109). なおこの文章 に附随してもう一つ指摘すると, Cyrano が読んだ Descartes の *Principes* は 1647年の仏訳本でなく,1643年のラテン語初版であるように思われる.というのは後

- 者では図 planches の各々はそれぞれ該当のページに組込まれてあるが,前者では最後に一括してまとめてある.上記引用の Cyrano の一節が,後者の方にはるかにピッタリであることは明らかだろう. このことは次稿でもう一度とりあげるはずである.
- 64) ≪Nous délibérâmes de partir le jour mesme. Je les 〔le comte de Colignac et le marquis de Cussan〕 suppliay de se mettre donc en chemin devant, parce que j'estois bien aise ayans (comme ils venoient de conclure) à y séjourner un mois, d'y faire porter quelques livres≫, (p. 107). なお Cyrano のこの文章を額面どおり受取ると,かれが *Principes* を読んだのは *Soleil* 執筆の前,そう遠くない時期だということになる. この点については,次稿でもう一度触れる.
- 65) ≪toutes celles [les parties canelées] qui viennent de la partie du Ciel marquée E, qui est le Zud...ont en la moitié de la Terre CAD les entrées des pores, par où elles passent sans cesse en ligne droite jusques à la superficie de son autre moitié CBD...》, *Principes*, IV, 146. なお, 図 planche によればAは南極, Bは北極, C, Dは赤道あたりを指す.
- 66) ≪II faut aussi remarquer...qu'il y en a d'autres, qui retournent dans le ciel vers G & H...≫, *Principes*, IV,147. なお図によると, GおよびHは赤道あたりの上方の天空を指す. そのあたりから天空に戻る理由については長くなるからここではのべない. Cf. *Principes*, III, 108. Comment la matière du premier element prend son Cours par ces pores.
- 67) たとえば Principes, III, 93. Qu'entre les parties canelées & les plus petites du premier element, il y en a d'vne infinité de diverses grandeurs 参照.
- 68) Pascal の有名な酷評がある. 《Si cette façon de prouver est reçue, il ne sera plus difficile de résoudre les plus grandes difficultés, et le flux de la mer et l'attraction de l'aimant deviendront aisés à comprendre, s'il est permis de faire des matières et des qualités exprès》, Lettre au P. Noël du 25 oct. 1647, in Pascal, Oeuvres complètes, Ed. J. Mesnard, tome II, 1970, p. 522.
- 70) «purgées de la grosse matière qui les [les âmes] empeschoit,...elles sont employées à former le sang et les esprits vitaux du Soleil, ce grand et parfait animal», (p. 182).
- 71) たとえば 《dès qu'une Plante, une Beste ou un Homme expirent, leurs âmes montent, sans s'éteindre, à sa sphère, de mesme que vous voyez la flamme d'une chandelle y voler en pointe, malgré le suif qui la tient par les pieds》, (p. 182).